

		WEDI	YN
MEDRU, GALLU:	可能性 (Possibility)	+	+
	身体的可能 (Physical possibility)	-	-
	能力 (Ability)	-	-
GALLU:	許可 (Permission)	-	+
CAEL:	偶発 (Eventuality)	+	+
	提案 (Suggestion)	+	+
	許可 (Permission)	-	+

アスペクトマーカ―の WEDI、YN と共起するもの (可能性、偶発、提案) は文修飾的 (sentential)、共起しないもの (身体的可能、能力) は非・文修飾的、両方が混じるもの (許可) は命題の特性のみが WEDI と共起し、事実を述べる表現になる。セット 3 は仮定、条件に限った表現で、上記のセット 1 と 2 を総合した基準で各動詞句を分類している。

5. 6. まとめ

ウェールズ語の動詞句を①条件文/非条件文、②モダリティー特性、③時制特性で分類していくことで、それぞれの活用パラダイム、迂言形式と屈折形式で現れた場合の違いを概観している。迂言は性質 (dispositional) を、屈折は個別の出来事 (episodic) を表わす傾向にあるが、それは類似した他の動詞句の意味特性や方言によっても異なる。

研究紹介 Rhif 9

Pilch, Herbert. 1984. "Structure of Welsh Tonality". *Studia Celtica* XVIII:234-252.

Thomas, Ceinwen H. 1967. "Welsh Tonality—A Preliminary Study". *Studia Celtica* II: 8-28.

音調とは、発話の調子のことで、例えば、疑問文や不確実な内容の発話の語尾において音調は上昇傾向にある、ということが出来ます。音調は、発話の中で目立ち (prominence) を置きたいところで上昇するなどして先行する音調と声の大きさや高さを変化させることによって表現されるため、音調変化は目立ちを持っている音節を頂点として引き起こされます。つまり、1つの発話の中でいくつか音調の変化はみられるものです。では音調の研究とはそうした変化の様子を逐一記述していくことかといえは違います。「こうしたケースでは、こういった特徴が見られる」と変化の傾向を見つけることによって、はじめて対象

言語の音調特徴をつかむことが出来るのです。ここで、Pilch (1984), Thomas (1967) の研究における、音調特徴を捉える試みを紹介していきます。

Pilch (1984) はまず音を捉える概念というものについて考察しています。誰もが英語はアルファベットの子音と母音とで書かれていると知っており、訓練をうければ発話からその字体を書き起こすことが出来ます。しかし、だれも子音・母音を逐一聞き取っているわけではないのです。「英語には子音と母音があり、発話はそれらの音素により構成されている」という前提があるために、ひとはそれに則って発話を区切り、単語にして、文法力も使って書き起こすことができます。例えば /a/ という音素を考えます。この母音を実際に発音したものを音声学的に観察すれば一つとして全く同じということはありませんが、それらは、一つの音が異なる形（異音）で何度も繰り返し現れていると判断されているのです。繰り返し出現する現象に名前をつけ、そしてそれが多くの人によっても違いを聞き取ることができるという実証を通じて、分析は可能となるのです。これが音を捉える際の共有の概念です。このように、音声分析を行う際には繰り返し起こり、他とは分類可能な現象について名前をつけ、それをを用いて分析を進めていく手法が必要となります。Pilch (1984) はウェールズ語の音声を聞き、繰り返し出現するピッチ変動の傾向を 6 つの記号（以下参照）を用いて表現しました。

	continuous	broken
rise	↗	↗↘
level	↔	↔↘
fall	↘	↘↗

上昇といっても、声の高さ（ピッチ、pitch）の違い方、つまり最も低い声から高い声までの急激な上昇か、中程度の声の高さから最高までのややゆるやかな上昇かといった区別の必要性も指摘しています。しかし、結論として「この発話（例えば断定的なものの言い方をする）では、こういう傾向がみられる」という指摘が出来ず、あらゆる発話は発話されたコンテキスト（背景の状況）の情報が必要であると述べています。つまり、繰り返しみられる音調変化の基本的な 6 つの動きは捉えることができたものの、それがあらわれるか否かは発話の状況によるという結論にいたったのです。というのも、ウェールズ語の発話では音調の位置ですら発話によって決められるため、コンテキストなしに音調の形状や程度について予測することが出来ないのです。その理由については次の章で言及します。

音調は文章の目立ちのある音節にみられるという言及をしましたが、この目立ちのある音節について考察しています。目立ちのある音節には、その音節に